

～ 「高・清フレンドリー古道」 ～

## 第3巻－Ⅲ部

「高・清直路古道」復元（旧道修復）



- ✓ まずは旧道ルートを実際に見極めることに注力し、藪漕ぎしながら周辺の状況調査と合わせて慎重に進捗を図った。旧道ルートは掘れた状態にあるものの確実に残っていることを確認したことから、安直に草付きの場所に新しいルートを取ることを避けた。
- ✓ 本区間旧道ルート上距離の半分以上は笹竹（一部に細い低雑木）が生い茂った・密生した状態にあり、まずは、旧道を再確認しつつ剪定鋏を使用した荒刈りを先行した。粗刈りした笹竹先端は鋭角で危険なことから、追って、地面付け根から1本1本切断作業を行った。全区間が旧道の修復であり、道幅30cmほどを確保したことからは普通に歩かれるようになった。
- ✓ 安易・不用意に草付きに入らないように、復元ルート沿いの樹木に、この道を外れるな！という強いメッセージであると受け止められるように5・6m間隔に目印用ピンクテープを付けた。

日時	主な作業内容（起点は二つこぶ岩）	対応者
2024(R6)年9月24日（火） 10:30～12:00（1時間30分）	起点から来名戸神までの旧道ルート全般調査 起点から追分碑までの旧道ルート確定 起点から追分碑までの一部笹竹刈払い	阿部剛士 大沼香
2024(R6)年9月26日（木） 13:15～14:05（50分）	追分碑から来名戸神までの旧道ルート確定 起点から追分碑までの笹竹刈払い	片倉忠幸 大沼香
2024(R6)年10月11日（金） 10:40～12:50（2時間10分）	追分碑から来名戸神までの笹竹刈払い	大沼香
2024(R6)年10月12日（土） 9:15～13:45（4時間30分）	起点から来名戸神までの笹竹刈払い	大沼香
2024(R6)年10月17日（木） 9:40～12:00（2時間20分）	起点から入り口部分のルート再調査と確定 起点から追分碑までの笹竹刈払い（完了）	大沼香
延べ5日間／通算作業時間11時間20分		延べ7人
（註）「起点」とは、図-1、後記図-8の「横道分岐目印二つこぶ岩」を指す。		
図(表)-2		

復元状況の一部は図(表)-3のとおり。刈払った笹竹は道に敷いたことから地面は出ていない。



図(表)-3

一冬を越年した来年は、笹竹は枯れつつあり、とても歩きやすい道になるはずである。せっかくここまで持って来たので、後世、修復・保全を継続して欲しいと切にお願いしたいものである。

なお、来名戸神においては、突当りに通行止めのトラロープを張って明示した。

## 2. 今回復元したルートの実在根拠

図-4——大正二（1913）年一月二十五日印刷 国土地理院地形図——において、来名戸神と追分碑間は往古の清川道、また、追分碑と横道分岐二つこぶ岩との間は点線で結ばれている。よって、今回の復元は一時的に管理が行き届かず一部笹竹により藪化していた状態を修復したものであり、したがって、新規ルートの開削ではない。

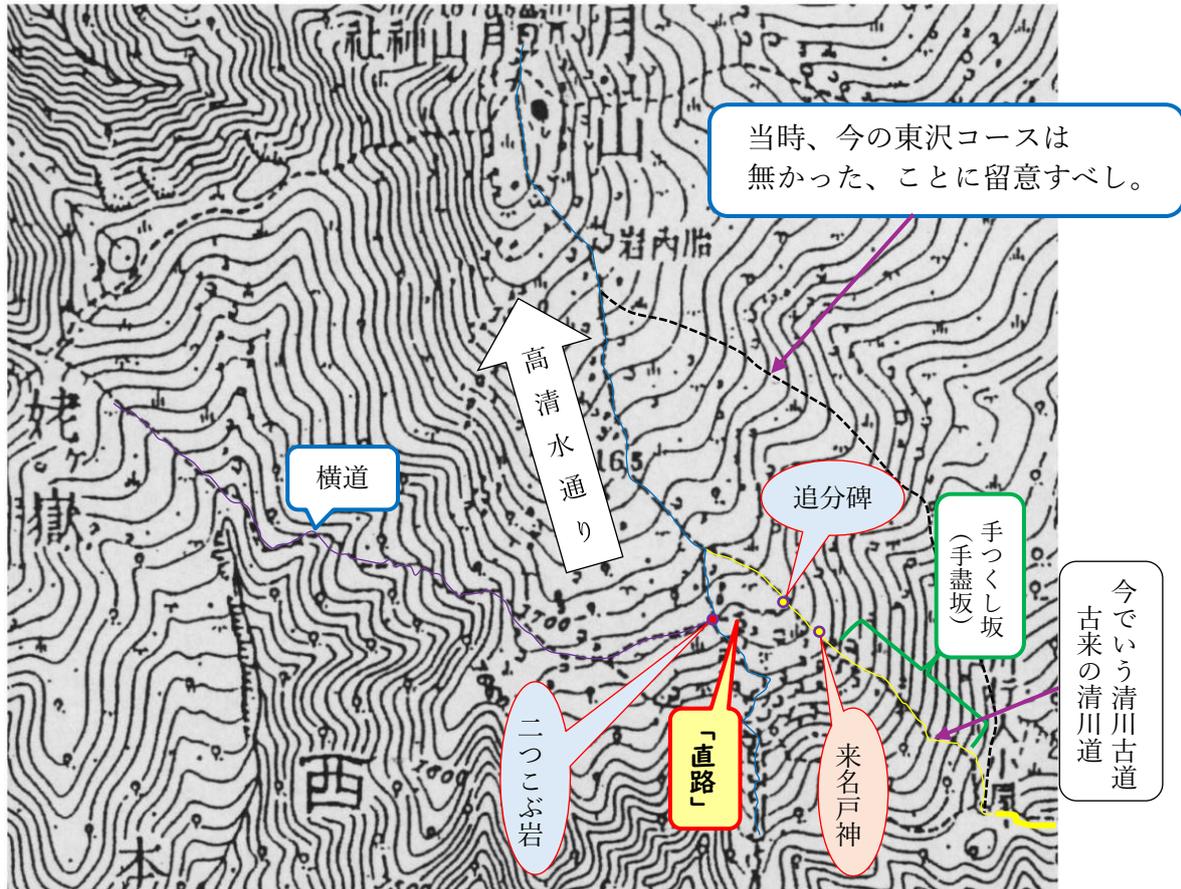


図-4

この道は、図-5——寛永16(1639)年頃より始まる両造法論関連『湯殿山論争絵図』（寛政4・1792年頃作成）の抜粋——に既に記述されていた道「**㊸直路**」である、江戸時代から使用されて来た悠久の歴史を持つ参詣道の一部である。

## 3. 「高・清直路古道」と称する根拠

この度復元した高清水通りから今でいう清川古道に結ぶこの区間は、次の  1 ~  3 の事情を総合勘案し、それぞれの頭文字を採用し、「高・清直路古道」と呼称することにする。なお、「清・高」の順も考えたが、清川行人小屋から来名戸神までは余りにも急峻で、かつ、一部濃い藪となっており、当分（未来永劫か？）復元は出来ぬ見通しであることから、高清水通りからのみ立

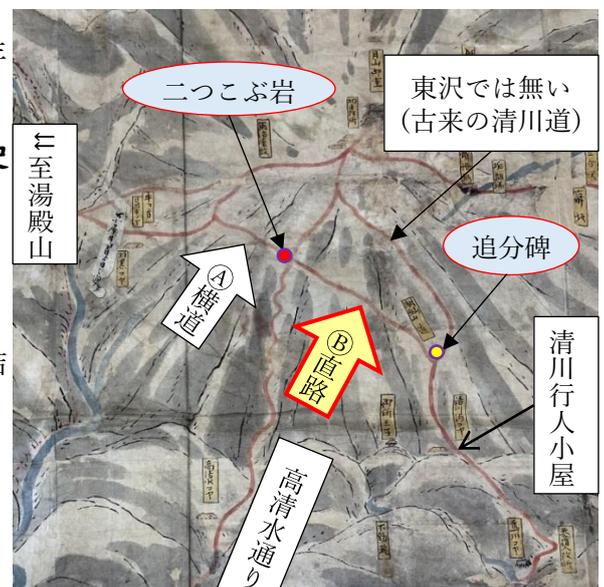


図-5

入可能となった現実を踏まえるものである。

✓ 1；前出古絵図（図－5）関連、西川町史編集資料 第八号（三）P128～に記載の真言4か寺で差し出した文書（古文書）の一部に「・・・<sup>がっさんごえ</sup>月山之腰手つくしと申處を岩根沢より湯殿山参詣之<sup>切り開いたことから</sup>直路を切開候得共、本道寺より<sup>たびたび、止めるようにはっきりと告げたところ</sup>度々相留堀切候而、今に道者一人も通し不レ申候、・・・一寛永十六（1639）年頃のもの」との中に直路が記述されていること。まさしく図－4・5の区間に一致すると推察（確定）出来る。

✓ 2；「月山・湯殿山追分碑」は、岩根沢に係る先人の書籍3冊——①原田一男著「月山登山案内」（山形山岳會・大正九年八月二十日初版発行）、②丸山茂著「神都 岩根澤之面影」（同刊行舎・昭和十五年十二月二十日発行）、③井場英雄著「岩根沢ものがたり」（岩根沢地区公民館・昭和五十一年十一月三日発行）——には、**存在を含めて一切記述されていない**が、現況における設置場所、図－6のとおり6の設置向きや寄進建立者は岩根沢山先達「長慶坊」であることから、清川道（清川古道）に入った岩根沢道者に対する道しるべ（道案内）の役目を与えその利便性供与を図るものであったこと。なお、これは本道寺関係文書（西川町史等）にも一切出て来ない。



左 湯殿山 牛首  
山先達  
福□  
長慶坊

右 月山 羽黒山  
道  
小□□町  
弥作  
ふくしま

外寸は凡そ、幅 82cm×地上高さ 55cm×厚み 18cm である。

図－6

✓ 3；前出書籍には「来名戸神」の名称（のみ）が記載されており、文脈から清川古道（古来の清川道）ルート上にあることから今般確認した現地と一致すること、そして、今回の復元はここまでに至り終わること。なお、今の同神は図－7のとおりであるが、**前出書籍にはこの史蹟のことは一切出て来ない**。また、本道寺関係文書（西川町史等）には名称すらも出て来ない。

#### 4. 「高清水通り」からの分岐点／今の状況

分岐点（合流点）は図－8のとおり、同図は月山を背に撮ったもの、分岐点から東方向の視界数 m 先に最初のピンクテープを垂下しているの直ぐ目に入る。西方向「横道」については、ここから少し先に点々とピンクテープが取り付けられているが約 80m 先で行き止まりとなる。



図－7



図-8

#### 4. もう一つの湯殿直結道

次頁図-10参照、原田一男著「月山登山案内」（山形山岳會・大正九年八月二十日初版発行）に次のような一説がある。「・・・（本道寺口高清水通りを登り、今の元高清水を過ぎた当りから）熊笹を分け木の葉の門を通るときは夏の暑さを忘れる位である、急に坂道に差し掛る、それは「手盡し」とて、山中第一の急坂であるが、途中に**大きな石**（今でいう「<sup>ごだつ</sup>御立石」）が道の側にある。其處が**十文字道**になつてゐるので、迷う人が多いが「手盡し」に向つて左は「焼山」方面に行く横道で、右は眼下に見える清川小屋に達する下り道である、石上で一憩すればいよいよ高山氣分を味はれる。・・・」

同図にプロットすると、同図「ここ」の場所において説明しているものであることが分かる。同案内書は大正九年発行であるから㊦→㊩→㊰の道はまだ存在していたということである。現在の「<sup>ごだつ</sup>御立石」は図-9のとおりで、ここに立って見ると、前著のとおり風景であり、ルートも想像出来るが、あまりにも急峻であり、よくぞ開削したものだと驚くばかりである。㊦→㊩→㊰の高・清直路古道経路と、ここ経路㊦→㊩→㊰のルートの開削の時間的前後は不明だが、湯殿山に如何にして短距離で結ぶのかということが動機であったのではないか。なお、この石はもちろん今の高清水通り道沿いにあり、今にも東側にひっくり返って行きそうな状態にある。



図-9

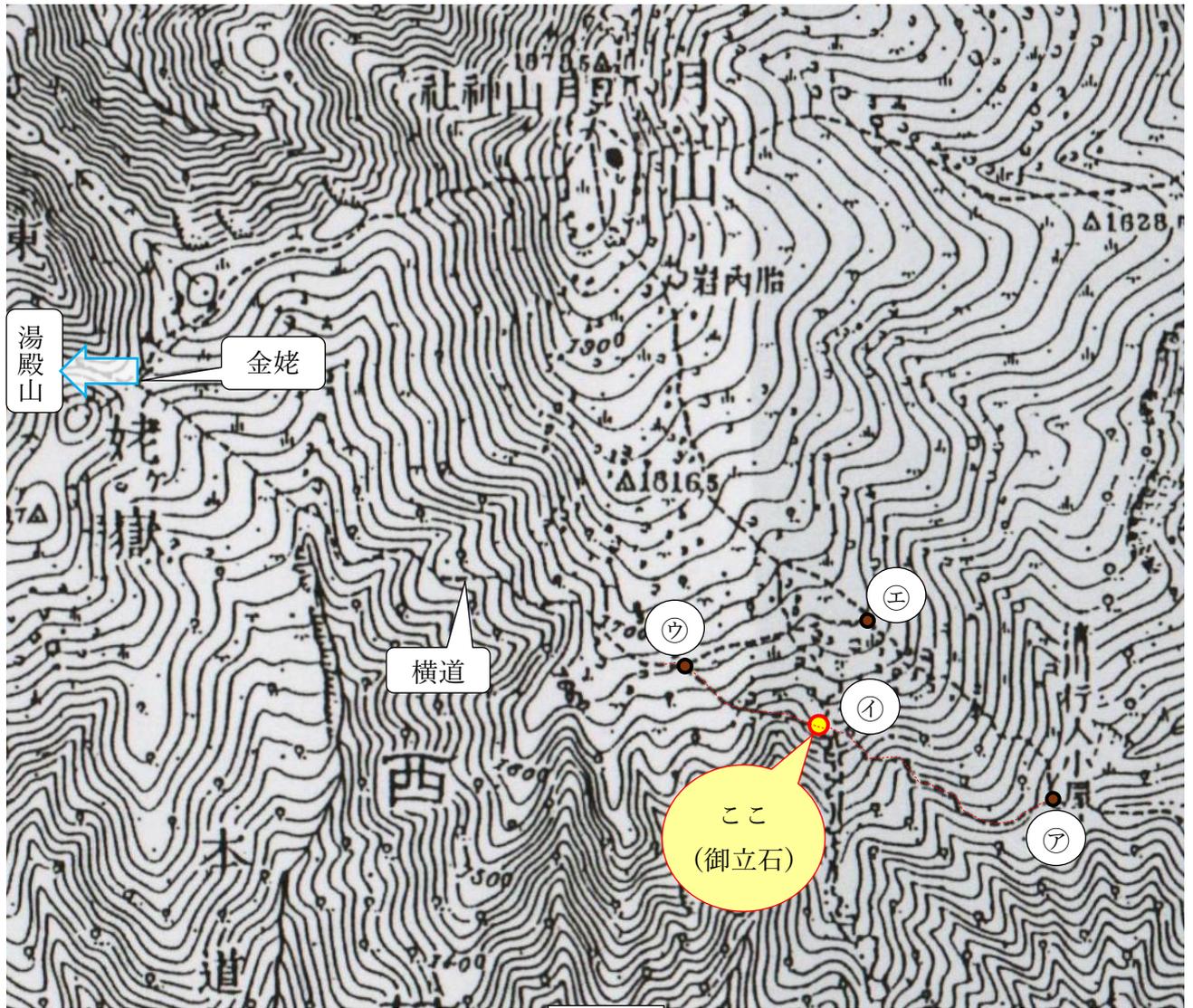


図-10

[あしがき]

今回、復元（旧道修復）した「高・清直路古道」は、その昔、岩根沢旧日月寺より分け入り、月山と湯殿山に宿る神仏かみほとけのご加護を一心に賜りたく、信仰心厚くひたすら祈りながら、かつ、自らの六根清浄を行じながら歩いた道者の汗と涙の染み付いた参詣道、祈りの道なのだ。とりわけ、あの熱いお湯が滴る湯殿山御宝前を目指して歩いた道である、単なる今様のピークハントの登山道ではなかったのだ。私が本古道の復元に注力するその心は、先人が、先輩達が相応の時間と労力を傾けて、参詣道保全のための道普請に努力して来た長い歴史に鑑みて、永久に廃れさせるのはもったいない、忍びないという気持ちからである、そのことに対する今世の私の報いでもあると思うからである。そしてこの度、道迷い不安のないようにしっかりとした道に仕上げたので、多くの人達から本古道に分け入り、その史蹟に対面しお参りして貰いたいと念じてお勧めするものである。高清水通り分岐点からは約610mの短い距離ではあるが、鑑賞しながらゆっくり往復すれば40分くらいだろうか。

本件復元を以って、従来知られていなかった不思議なものを、今、広く周知出来るようになったこと、そして、この「月山ユートピア・ランド」と称するこの一帯に新しい魅惑のスポットを提供出来るようになったことは、本件に係った仲間と共に率直にとっても嬉しく思う。

(end)